The Bulletin of Saitama Prefectural University　■ 研究報告 ■

# 被虐待経験が子どもの行動特徴に及ぼす影響
## －里親委託児における愛着の問題に関する調査－

林　恵津子

# Effects of Child Abuse and Neglect on Attachment Problem in Children Receiving Foster Care

Etsuko Hayashi

要旨
【目的】被虐待経験が里親委託児の行動特徴に影響するかを把握する。
【方法】養育里親を対象にした質問紙を用いて、里親委託児の被虐待経験の有無と行動特徴を訊ねた。
【結果】被虐待経験のある子どもで、愛着の問題に関連する行動が有意に多かった。
【考察】現在は整った生活環境にあっても、被虐待経験が子どもたちの愛着の問題に関連する行動の発現に影響を与えていた。
【結論】養育里親には、愛着の問題が起因となる行動特徴について丁寧な情報提供と支援が必要であろう。

キーワード：被虐待経験、里親委託児、愛着の問題
Key words : child abuse and neglect , children receiving foster care,　attachment problem

## 1．諸　言

平成25年度全国の児童相談所で対応した児童虐待相談対応件数は73,765件であり、前年度比111%だった[1]。児童養護施設入所児童等における虐待経験の調査では、里親委託児の31.1%、児童養護施設児の59.5%、情緒障害児施設児の71.2%、児童自立支援施設児の58.5%と報告された[2]。要保護児童の施設入所理由に、被虐待経験は大きな割合を占めている。

虐待が子どもたちの心身に与える影響は計り知れない。子ども時代の精神的ストレスは、その後の脳の発達における2つの決定的な要素であるシナプス形成および髄鞘形成に影響を与えるからだ[3]。近年、被虐待経験が脳の発達に影響を与えるとの研究結果が多く報告されている[4,5,6]。また、世代間連鎖も看過できない問題である[7]。

杉山[8,9]は、被虐待児の臨床像として、幼児期には反応性愛着障害と広汎性発達障害症状が目立ち、小学生では多動性障害が目立つようになり、思春期には解離性障害や複雑性心的外傷後ストレス障害が目立つようになると臨床像の経年変化を報告した。この報告に基づけば、愛着障害が被虐待児の根底にあり、年齢とともに表出行動特徴が変化すると考えられる。子どもに見られる愛着障害症状をヘネシー[10]は、家族や教員等身近な支援者にも理解を促すことを目的に、感情面、行動面、思考面、人間関係、身体面、道徳面でカテゴリー化し行動特徴を整理した。このような愛着の問題は、DSM-5[11]では、従前の愛着障害を心的外傷およびストレス因関連障害群の中に整理した。不適切な養育環境が欠如していた後遺症として、反応性アタッチメント障害と脱抑制型対人交流障害を記載している。反応性アタッチメント障害とは、抑うつや引きこもり行動を伴う内在化障害であり、一方、脱抑制型対人交流障害とは、脱抑制と外在化行動を行動特徴としている。五歳未満までに親やその代理となる人と愛着関係が持てず、人格形成の基盤において適切な人間関係を持つ能力に障害があると定義されている。このような行動を示す子どもたちの良好な成育環境の整備が急がれる。

さて、我が国における社会的養護はこれまで施設入所を中心に行われてきた。保護者のいない児童や

埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉子ども学科福祉子ども学専攻
Division of Child Science, Department of Social Work and Child Science
原稿受付日：2015年●月●5日

被虐待児など家庭環境上養護を必要とする要保護児童に対して、里親委託児は少ない[12]。国は、社会的養護が必要な児童を、可能な限り家庭的な環境において安定した人間関係の下で育てることができるよう、施設のケア単位の小規模化や里親やファミリーホームなどを推進している。今後十数年をかけて施設機能の地域分散化を進めると同時に、家庭養護である里親・ファミリーホーム（小規模住居型家族養育事業）への委託を推進し、社会的な養護を必要とする子どもたちの里親委託率を引き上げる方向性が示された[13]。

里親制度は、家庭的な環境の下で子どもの愛着関係を形成し、養護を行うことができる制度である。厚生労働省は、里親制度の推進と質の高い養育の提供を図るため、様々な対策を講じているが、そのうちのひとつに平成21年度から開始された養育里親と専門里親の里親研修や5年ごとの更新研修がある。

そこで課題になるのは、里親委託児の行動特徴である。前述した厚生労働省[2]の報告にあるように、里親委託児の3割以上に虐待経験がある。試し行動や愛着の問題など、様々な形で育てづらさが出る場合が多いと指摘されている[13]。筆者は、埼玉県の養育里親更新研修の講師を務めている。養育里親への支援の充実を図ることと更新研修の内容について有用性を確認することを目的に、養育里親に協力を求め、養育里親委託児の行動特徴を調査した。

## 2．方　法

1）調査協力者

平成26年度と27年度の埼玉県養育里親更新研修の参加者462名を対象とした。参加者には以下に記す倫理的配慮を伝える際、回答は任意である旨も伝えた上で、回収率は100%だった。研修参加者には里子の未委託者もいた。その要因も含め、有効回答数は359（77.7%）だった。

2）手続きおよび倫理的配慮

養育里親更新研修の参加者に対して、無記名式・自記式の質問紙調査を実施した。研修後に質問紙の趣旨を説明し協力を求めた。質問紙への回答協力は、自由意思に基づき、協力しない場合でも不利益はないことを保障した。答えたくない質問には無回答で、また途中で記入をやめて廃棄しても構わないことを伝えた。会場には質問紙の提出用ボックスを用意した。回答し提出することで、本研究への同意が得られたとみなした。なお、調査実施に先立ち、埼玉県立大学倫理委員会の承認を得た（承認番号26096）。

3）質問項目

養育里親については、当該委託児の養育年数を尋ねた。里親委託児については、現在の年齢、出生家庭から離れた年齢、施設入所経験、被虐待経験の有無を尋ねた。

愛着障害症状については、ヘネシー[7]のカテゴリーを引用し、より分かりやすい表現に改変した。ただし、DSM-5では「愛着障害」という診断名は存在しないことから、本稿では「愛着の問題に関連する行動特徴」と記述する。養育里親に提示した質問紙にも、愛着障害の文言は避け、「お子さんに見られる行動特徴のうち、当てはまるものはありますか」と尋ねた。質問紙に挙げた行動特徴は、感情面が8項目、行動面が10項目、思考面が8項目、人間関係面が9項目、身体面が5項目、道徳・倫理面が4項目の合計44項目とした。

## 3．結　果

1）里親委託児の現在の年齢と被虐待経験の有無

養育里親から得られた有効回答359名の内、被虐待経験のある里親委託児は100名（27.8%）、被虐待経験のない里親委託児は189名（52.6%）、不明もしくは無回答は70名（19.5%）だった。被虐待経験のある里親委託児は、中学生と高校生が多く、約半数を占めた。一方、被虐待経験のない里親委託児は年少の子どもが多く、3歳未満と未就学児をあわせると半数を超えた（表1）。

出生家庭での養育を被虐待経験の有無で見たところ、被虐待経験のある里親委託児では、「3歳未満まで」と「就学まで」をあわせると半数近くになった（表2）。施設入所経験は、被虐待経験のある里親委託児では児童相談所の一時保護所、乳児院、児童養護施設が多く、被虐待経験のない里親委託児では乳児院が最も多かった。現在の養育里親による養育は、被虐待経験のある里親委託児の7割近く、被虐待経験のない里親委託児の半数近くが5年未満だった（表3）。

表１　里親委託児の現在の年齢

| 被虐待経験 | 3歳未満 | 未就学 | 小学校低学年 | 小学校高学年 | 中学 | 高校 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) |
| あり | 0 (0.0) | 18(18.0) | 19(19.0) | 15(15.0) | 27(27.0) | 21(21.0) | 100(100) |
| なし | 41(21.7) | 66(34.9) | 32(16.9) | 17 (8.9) | 18 (9.5) | 15 (7.9) | 189(100) |
| 不明・無回答 | 7(10.0) | 21(30.0) | 14(20.0) | 10(14.3) | 9(12.9) | 9(12.9) | 70(100) |
| 計 | 48(13.4) | 105(29.2) | 65(18.1) | 42(11.7) | 54(15.0) | 45(12.5) | 359(100) |

表２　出生家庭での養育

| 被虐待経験 | 3歳まで | 就学まで | 小学校低学年まで | 小学校高学年まで | 中学まで | 高校まで | 未回答 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) |
| あり | 37(37.0) | 11(11.0) | 9 (9.0) | 10(10.0) | 11(11.0) | 11(11.0) | 11(11.0) | 100(100) |
| なし | 137(72.5) | 7 (3.7) | 5 (2.6) | 4 (2.1) | 7 (3.7) | 0 (0.0) | 29(15.3) | 189(100) |
| 不明・無回答 | 40(57.1) | 11(15.7) | 3 (4.2) | 2 (2.9) | 4 (5.7) | 1 (1.4) | 9(12.9) | 70(100) |
| 計 | 214(59.6) | 29(8.1) | 17 (4.7) | 16(4.5) | 22 (6.1) | 12 (3.3) | 49(13.6) | 359(100) |

表３　里親委託児の養育年数

| 被虐待経験 | 1年未満 | 1年以上<br>5年未満 | 5年以上<br>10年未満 | 10年以上<br>15年未満 | 15年以上 | 未回答 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) |
| あり | 27(27.0) | 41(41.0) | 10(10.0) | 7 (7.0) | 7 (7.0) | 8 (8.0) | 100(100.0) |
| なし | 20(10.6) | 91(48.1) | 36(19.0) | 15 (7.9) | 10 (5.3) | 17 (9.0) | 189(100.0) |
| 不明・無回答 | 13(18.6) | 27(18.6) | 8(18.6) | 7(18.6) | 7(18.6) | 8(18.6) | 70(100.0) |
| 計 | 60(16.7) | 159(44.3) | 54(15.0) | 29(8.1) | 24 (6.7) | 33 (9.2) | 359(100.0) |

2) 虐待の種類

虐待の種類については複数項目の回答を可として尋ねたところ、被虐待経験が「ある」里親委託児では、ネグレクトが7割強と最も多く、次いで身体的虐待と心理的虐待が3割強だった（表4）。各虐待の割合を加算すると16割ほどになる。複数の虐待を受けていたことが分かる。

表４　虐待の種類

| ネグレクト | 身体的虐待 | 性的虐待 | 心的虐待 | 無回答 |
|---|---|---|---|---|
| n(%) | n(%) | n(%) | n(%) | n(%) |
| 74(74.0) | 37(37.0) | 9 (9.0) | 36(36.0) | 7 (7.0) |

回答は複数回答可とした。

(%)は、被虐待経験有りと回答したn=100に対する割合を示している。

3) 被虐待経験の有無でみた里親委託児の行動特徴

ヘネシーが挙げた愛着障害症状は、3歳以下の子どもには現実的でない。また、被虐待経験のある里親委託児に3歳以下の子どもはいなかった。そこで、被虐待経験のない里親委託児189名のうち3歳以下の子ども41名を除いた148名を対象とすることにした。よって、行動特徴については、被虐待経験のある里親委託児100名と、被虐待経験のない里親委託児148名を比較した（表5）。

表５　被虐待経験の有無で見た里親委託児の愛着の問題に関連する行動特徴

| 感情面 | 被虐待経験あり<br>n=100 | 被虐待経験なし<br>n=148 | χ2(df) | |
|---|---|---|---|---|
| | n(%) | n(%) | | |
| 孤独感、疎外感を持っている | 32(32.0) | 9 (6.1) | χ2(1)=27.205 | p<.01 |
| イライラしていて抑制がきかない | 28(28.0) | 18(12.2) | 8.888 | p<.01 |
| なかなか泣き止まない | 10(10.0) | 8 (5.4) | 1.251 | n.s. |
| かんしゃくをおこしやすい | 27(27.0) | 46(31.1) | 0.302 | n.s. |
| 心から喜ばない | 18(18.0) | 11 (7.4) | 5.471 | p<.05 |
| 怒りっぽい | 36(36.0) | 35(23.7) | 3.872 | p<.05 |
| パニックを起こしやすい | 12(12.0) | 13 (8.7) | 0.372 | n.s. |
| 未来に絶望している | 14(14.0) | 4 (2.7) | 9.699 | p<.01 |

| 行動面 | 被虐待経験あり n=100 n(%) | 被虐待経験なし n=148 n(%) | χ2(df) | |
|---|---|---|---|---|
| 過度の刺激を求める | 15(15.0) | 4(2.7) | χ2(1)=11.078 | p<.01 |
| 権威のあるひとに反抗的・挑発的 | 19(19.0) | 7(4.7) | 11.474 | p<.01 |
| 反社会的行動がある | 21(21.0) | 3(2.0) | 22.454 | p<.01 |
| 破壊的行動がある | 18(18.0) | 7(4.7) | 10.176 | p<.01 |
| 欲求不満に自制がきかない | 25(25.0) | 19(12.8) | 5.244 | p<.05 |
| 他人に責任を転嫁する | 25(25.0) | 23(15.5) | 2.842 | n.s. |
| 自虐的、自傷行為 | 14(14.0) | 5(3.4) | 8.075 | p<.01 |
| 動物や弱いものに残酷 | 7(7.0) | 5(3.4) | 1.004 | n.s. |
| 暴食、過度の偏食 | 19(19.0) | 14(9.5) | 3.918 | p<.05 |
| 多動 | 14(14.0) | 23(15.5) | 0.023 | n.s. |

| 思考面 | 被虐待経験あり n=100 n(%) | 被虐待経験なし n=148 n(%) | χ2(df) | |
|---|---|---|---|---|
| 人間関係や人に否定的 | 17(17.0) | 2(1.4) | χ2(1)=18.505 | p<.01 |
| 新しいことに挑戦しない | 12(12.0) | 18(12.2) | 0.026 | n.s. |
| 年齢相応な考えができない | 35(35.0) | 22(14.9) | 12.554 | p<.01 |
| 忍耐力や集中力が低い | 44(44.0) | 40(27.0) | 6.936 | p<.01 |
| 学習に落ち着いて取り組まない | 31(31.0) | 22(14.9) | 8.311 | p<.01 |
| パタンへの固執 | 11(11.0) | 13(8.8) | 0.130 | n.s. |
| 柔軟な考えが難しい | 31(31.0) | 23(15.5) | 7.490 | p<.01 |
| 常識が通用しない | 12(12.0) | 7(4.7) | 3.490 | n.s. |

| 人間関係面 | 被虐待経験あり n=100 n(%) | 被虐待経験なし n=148 n(%) | χ2(df) | |
|---|---|---|---|---|
| 人を信頼しない | 20(20.0) | 5(3.4) | χ2(1)=16.402 | p<.01 |
| 愛情を受け入れない | 10(10.0) | 5(3.4) | 3.513 | n.s. |
| 倫理観や良心が乏しい | 16(16.0) | 5(3.4) | 10.691 | p<.01 |
| 見知らぬ人にも愛嬌を振りまく | 30(30.0) | 23(15.5) | 6.590 | p<.05 |
| 平気で他虐行為を行う | 9(9.0) | 00.0 | 11.368 | p<.01 |
| 自分の間違いを人のせいにする | 25(25.0) | 28(18.9) | 0.976 | n.s. |
| 同年齢の友だちとトラブルが多い | 23(23.0) | 12(8.1) | 9.725 | p<.01 |
| 人の目を見ない | 13(13.0) | 9(6.1) | 2.730 | n.s. |
| 共感や同情が難しい | 12(12.0) | 12(8.1) | 0.637 | n.s. |

| 身体面 | 被虐待経験あり n=100 n(%) | 被虐待経験なし n=148 n(%) | χ2(df) | |
|---|---|---|---|---|
| 身体発達が未熟 | 15(15.0) | 6(4.1) | χ2(1)=7.867 | p<.01 |
| 痛みに対して忍耐強い | 20(20.0) | 8(5.4) | 11.276 | p<.01 |
| 触られることを嫌がる | 12(12.0) | 7(4.7) | 3.490 | n.s. |
| ケガをしやすい | 17(17.0) | 17(11.5) | 1.103 | n.s. |
| 非衛生になりやすい | 11(11.0) | 10(6.8) | 0.893 | n.s. |

| 道徳・倫理面 | 被虐待経験あり n=100 n(%) | 被虐待経験なし n=148 n(%) | χ2(df) | |
|---|---|---|---|---|
| 自分を悪い子だと思っている | 12(12.0) | 2(1.4) | χ2(1)=10.784 | p<.01 |
| 愛することができないと思っている | 11(11.0) | 1(0.7) | 11.664 | p<.01 |
| 有名な悪人や犯罪者に憧れる | 2(2.0) | 00.0 | 1.008 | n.s. |
| 後悔や自責の念が乏しい | 14(14.0) | 6(4.1) | 6.677 | p<.01 |

(1) 感情面

感情面の行動特徴として8項目を挙げた。全ての項目で、被虐待経験のある里親委託児で当てはまるとの回答率が高かった。被虐待経験の有無と当該行動の発現との連関性を見るために$\chi^2$検定を行った。その結果、被虐待経験のある里親委託児において8項目中5項目で有意に該当率が高かった。その5項目は、「孤独感、疎外感を持っている」「イライラして抑制がきかない」「心から喜ばない」「怒りっぽい」「未来に絶望している」だった。

(2) 行動面

行動面の行動特徴として10項目を挙げた。うち9項目で被虐待経験のある里親委託児で当てはまるとの回答率が高かった。被虐待経験の有無と当該行動の発現との連関性を見るために$\chi^2$検定を行った結果、7項目で被虐待経験のある里親委託児において有意に該当率が高かった。その7項目

は、「過度の刺激を求める」「権威のあるひとに反抗的・挑発的」「反社会的行動がある」「破壊的行動がある」「欲求不満に自制がきかない」「自虐的、自傷行為」「暴食、過度の偏食」だった。

(3) 思考面

思考面の行動特徴として8項目を挙げた。うち7項目で被虐待経験のある里親委託児で当てはまるとの回答率が高かった。被虐待経験の有無と当該行動の発現との連関性を見るために$\chi^2$検定を行った結果、5項目で被虐待経験のある里親委託児において有意に該当率が高かった。その5項目は、「人間関係や人生に否定的」「年齢相応な考えができない」「忍耐力や集中力が低い」「学習に落ち着いて取り組まない」「柔軟な考えが難しい」だった。

(4) 人間関係面

人間関係の行動特徴として9項目を挙げた。全ての項目で被虐待経験のある里親委託児で当てはまるとの回答率が高かった。被虐待経験の有無と当該行動の発現との連関性を見るために$\chi^2$検定を行った結果、5項目で被虐待経験のある里親委託児において有意に該当率が高かった。その5項目は、「人を信頼しない」「倫理観や良心が乏しい」「見知らぬ人にも愛嬌を振りまく」「平気で他虐行為を行う」「同年齢の友だちとトラブルが多い」だった。

(5) 身体面

身体面の行動特徴として5項目を挙げた。全ての項目で被虐待経験のある里親委託児で当てはまるとの回答率が高かった。被虐待経験の有無と当該行動の発現との連関性を見るために$\chi^2$検定を行った結果、2項目で被虐待経験のある里親委託児において有意に該当率が高かった。その2項目は、「身体発達が未熟」「痛みに対して忍耐強い」だった。

(6) 道徳・倫理面

道徳・倫理面の行動特徴として4項目を挙げた。全ての項目で被虐待経験のある里親委託児で当てはまるとの回答率が高かった。被虐待経験の有無と当該行動の発現との連関性を見るために$\chi 2$検定を行った結果、3項目で被虐待経験のある里親委託児において有意に該当率が高かった。その3項目は、「自分を悪い子だと思っている」「愛することができないと思っている」「後悔や自責の念が乏しい」だった。

## 4. 考　察

有効回答の359名の内、被虐待経験のある里親委託児は3割程度であったこと、虐待の種類はネグレクトが最も多く7割程度であったことは、厚生労働省の報告[2]とほぼ同程度だった。よって、この調査対象の里親委託児の被虐待経験に大きな偏りはないと考えている。

被虐待経験の有無や年齢および施設利用歴を見ると、被虐待経験のある里親委託児は、就学前に出生家庭から離れ、何らかの施設入所を経て、現在は中・高生になり養育里親とともに暮らしているという傾向が見てとれる。よって、被虐待経験は大部分の里親委託児にとって幼少時の出来事であり、数年間は適切な養育環境で過ごしていることになる。

被虐待経験のある里親委託児は、愛着の問題に関連する行動特徴を示す傾向が認められた。カイ二乗検定で被虐待経験と行動特徴の連関性をみたところ、設定した44の質問項目のうち27項目で、被虐待経験のある里親委託児では愛着の問題に関連する行動特徴が有意に多く報告された。被虐待経験のある里親委託児には、現在では適切な養育環境が用意されている。にもかかわらず、愛着の問題に関連する行動特徴が見られることは、被虐待経験が子どもたちの脳の発達に深刻な影響を及ぼすという所見[3-5]に合致する。

厚生労働省は、今後の社会的養護のあり方として家庭的養護の充実を目指している[13]。愛着の問題に関連する行動特徴を示す子どもへの対応は非常に難しい。養育里親の不安や混乱を軽減するためには、丁寧な情報提供と支援体制の充実が不可欠と考える。

## 文　献


1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課.平成25年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数等（速報値）2014年8月4日.
http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000053235.pdf.2015年9月1日閲覧

2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課.児童養護施設入所児童等調査結果（平成25年2月1日現在）.
http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11905000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Kateifukushika/0000071184.pdf.2015年1月14日閲覧

3) 友田智美.虐待によって生じる脳の変化.いやされない傷-児童虐待と傷ついていく脳,診断と治療社,東京2012:48-105

4) De Bellis MD, Keshavan MS, Frustaci K, Shifflett H, Iyengar S, Beers SR, Hall J. Superior temporal gyrus volumes in maltreated children and adolescents with PTSD. Biol Psychiatr 2002;51:544-552

5) Tomoda A, Nevalte CP, Polcari A, Sadato N, Teicher MH. Childhood Sexual Abuse is Associated with Reduced Gray Matter Volume in Visual Cortex of Young Women. Biol Psychiatry 2009;66:642-648

6) Tomoda A, SheuYS, Rabi K, Suzuki H, Naval C, Polcari A, Teicher MH. Exposure to parental verbal abuse is associated with increased gray matter volume in superior temporal gyrus. Neuroimage 2010;54:280-286
7) Oliver JE. Intergenerational transmission of child abuse: Rates, research, and clinical implications. Am J Psychiatry 1993;150:1315-1324
8) 杉山登志郎.発達障害としての子ども虐待.子ども虐待という第四の発達障害,学習研究社,東京2007:8-23
9) 杉山登志郎.発達障害としての子ども虐待.子どもの虐待とネグレクト2006;8:202-21
10) ヘネシー澄子.愛着障がいの症状とは.子を愛せない母、母を拒否する子,学習研究社東京2004:39-52
11) 高橋三郎,大野裕,監訳.DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル,医学書院,東京2014:263-288
12) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課. 社会的養護の現状について（参考資料）平成26年3月.
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/yougo_genjou_01.pdf.2015年9月1日閲覧
13) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課. 社会的養護の課題と将来像の実現に向けて平成27年3月27日.
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000081378.pdf.2015年9月1日閲覧